

# 「巢の入り口で足跡を消せ」

人文主義的書簡から『エッセー』における一人称へ

加藤 広和

『エッセー』最大の特徴が自己の描出にあることは論を俟たない。モンテーニュ自身、自著の特異性を述べてもいる。

他に題材となるものはなにも持ち合わせていないとわかったので、自分に自分を、論じる主題として供したのです (je me suis présenté moy-mesmes à moy pour argument et pour subject)。このように御しがたく途方もない企図で編まれた書物は、この世にふたつとありません<sup>1</sup>。

だが、自己そのものを対象とした省察的文章は決してモンテーニュ以前に遡れないわけではない。とりわけ、『エッセー』の形式的先駆ジャンルのひとつとして主に人文主義者らが編纂・出版した書簡集が存在するということは夙に指摘されてきた<sup>2</sup>。本論文では、人文主義的書簡集というジャンルの起源であるペトルルカ『近親書簡集』冒頭の書簡を主に参照しつつ、書簡という媒体上で実際にどのような主体が構築されていたのか、そして『エッセー』はそれをどう受け継いだのかを検討する。具体的には、1巻38章「孤独について」および1巻39章「キケロについての考え」を書簡集との関係という観点から読むことで、『エッセー』における主体がどのようにして立ち上がったのかを、文芸史的視座から考えたい。

\*\*\*

1345年、ペトルルカはキケロの「アッティクス宛書簡集」などを含む写本を発見、それを筆写したのみならず、自らの書簡をまとめて『近親書簡集』

---

<sup>1</sup> Montaigne, *Les Essais*, éd. Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », II, 8, p. 404 以降、『エッセー』からの引用はこの版に依り、題名、巻数、章番号、頁数の順に示す（この箇所の場合 *Les Essais*, II, 8, p. 404）。

<sup>2</sup> たとえば Hugo Friedrich, *Montaigne*, tr. Robert Rovini, Gallimard, 1968, p. 368-373.

として公開する<sup>3</sup>。もともと若年の頃からキケロを偏愛していたペトルルカがその発見に興奮するのは当然だったが、それ以上にペトルルカを驚かせたのは、そこに描かれていたキケロの姿だった。そこには、弁論家にして哲学者としてのキケロはおらず、世俗的栄光に目がくらんでころころと意見を変える、ひとりの人間キケロがまざまざと写されていたのだ。こうして、ペトルルカは自身が抱いていたキケロ像の変更を迫られることになる<sup>4</sup>。だが、ペトルルカはただキケロに幻滅して終わったわけではなかった。現実の政治や日々の雑事に汲々とし、ゴシップを友人と語りあうキケロの姿を書簡の中に認めたことが、文学ジャンルとしての書簡が持つ可能性に気づく契機ともなったのだ。キャシー・エデンはこの過程を「親密さ intimacy」の発見という観点から整理しており<sup>5</sup>、ペトルルカによって「親密に」読み、書くというモードが再発見されたとまとめることができる。

ではその「親密な」エクリチュールとは具体的にはどのような機能を果たすものだったか。ペトルルカは一連の経験を通して、断片的な散文テキストが人格を伝える媒体たり得ることを知った。そこでテキストの彼方に見いだされる著者の人となり伝えるのは、単純な伝記的事実のような情報ではない。実際、ペトルルカが衝撃を受けたのはキケロに関する個別具体的な、些末な日常についての記述ではなかった。そういった些細な情報を伝える文章のあり方が新しかったのだ<sup>6</sup>。ペトルルカが再現してみせた親密なエクリチュールは、書簡という散文様式と強く結びついた主体——書簡の主体を現出

---

<sup>3</sup> V. Giuseppe Billanovich, *Petrarca Letterato : I. Lo scrittoio del Petrarca*, Roma, Edizioni di Storia e Letteratura, coll. « Via Lancellotti », 18, p. 1-55.

<sup>4</sup> その衝撃は『近親書簡集』最終巻に収められたキケロ宛の書簡に残されている。「いまあなたがどこにいるにせよ、今度はあなたにこれを聞いていただきたい。これは、真なる愛情ゆえのものですが、忠告というよりは嘆きです。あなたのことをこよなく敬愛するあるひとりの後継者が、涙ながらに発した嘆きなのです」(*Familiarium rerum liber*, XXIV, 3, 1, Francesco Petrarca, *Le familiari*, per cura di Vittorio Rossi (v. 4 per cura di Umberto Bosco), Firenze, G. C. Sansoni, coll. « Edizione nazionale delle opere di Francesco Petrarca », 13, 1942, p. 226 以降『近親書簡集』からの引用はこの版により、題名(*Fam.*と略す)、巻数、書簡番号、段落番号、校訂版の巻数、頁数の順で表記する(この箇所の場合、*Fam.*, XXIV, 3, 1, v. 4, p. 226)。

<sup>5</sup> Kathy Eden, *The Renaissance Rediscovery of Intimacy*, Chicago and London, The University of Chicago Press, 2012.

<sup>6</sup> ロナルド・G・ウィットはダンテの書簡には後の時代の書簡を興味深いものにしていくような「親密さ intimacy」が欠けていると指摘、それはダンテ個人の資質ではなく、そのような形式が当時は存在しなかったからだと論じている：Ronald G. Witt, « Medieval “Ars Dictaminis” and the Beginnings of Humanism : A New Construction of the Problem », *Renaissance Quarterly*, v. 35, 1982, p. 19.

させる場となったのである。従って、書簡上に形成された主体の特徴を考えるためには、書簡ジャンルの文体的特徴に注目する必要がある。ここで網羅的な議論を行うことはできないが、本論文では以下の2点に着目したい：即興性・自発性・著者相同性と、二人称の聞き手の存在である。

即興的で自発的な「くだけた」文体で、著者の「ありのまま」の姿を写す文章であることは、歴史的に書簡の主要な特徴と見なされてきた<sup>7</sup>。そしてそれを可能にするための親密な対話相手が存在すること（常に二人称が想定されていること）と言えるだろう。しかし、確かに『近親書簡集』内でも即興的性格は強調されるものの、個々の書簡も書簡集全体も実際は一貫した表現意図のもとに作られた構築物であり、簡素な文体の強調はいわば「装われた謙譲」に過ぎない<sup>8</sup>。たとえば、ヴァントゥー山登攀を綴ったよく知られる書簡（*Fam.*, IV, 1）も、召使いたちが夕餉のしたくて忙しくしているあいだに、隔絶された部屋へと引きこもって「大急ぎで即席に<sup>9</sup>」書いたとされる。だが、書簡内では1336年に書かれたように示唆されているものの、実際の執筆年代は1352年もしくは1353年と考えられている<sup>10</sup>。また、内容的にも、登山の行程を自身の信仰の歩みと重ねるアレゴリー的な企図のもと、高度に芸術的に構成されており、とても夕飯前に書き上がるようなものとは思えない。なぜわざわざ執筆の過程を偽ってまで非作為性や即興性を演出するのか。それは、人文主義的書簡というジャンルそのものが、親密な語りを成立させるために、文章が「洗練されておらず、手から偶然滑り落ちた<sup>11</sup>」ものであることを要請するからだ。これはテキスト上に自己と同一視可能な主体を構築す

---

<sup>7</sup> こういった特徴が書簡ジャンルにおける重要な特性と見なされてきた点については以下を参照：Wolfgang G. Müller, « Der Brief als Spiegel der Seele : Zur Geschichte eines Topos der Epistolartheorie von der Antike bis zu Samuel Richardson », *Antike und Abendland*, v. 26, 1980, p. 138-157. 書簡をめぐる理論的言説史は以下を参照：Pedro Martín Baños, *El arte epistolar en el Renacimiento Europeo 1400-1600*, Bilbao, Universidad de Deusto, 2005.

<sup>8</sup> カール・エネンケルは『近親書簡集』冒頭の書簡を中心に扱いつつ、同書を貫く表現意図を指摘している：Karl A. E. Enenkel, « Die Grundlegung humanistischer Selbstpräsentation im Brief-Corpus : Francesco Petrarca's *Familiarium Rerum Libri XXIV* », dans *Self-Presentation and Social Identification : The Rhetoric and Pragmatics of Letter Writing in Early Modern Times*, éd. Toon van Houdt, Jan Papy, Gilbert Tournoy et Constant Matheussens, coll. « Supplementa Humanistica Lovaniensia », XVIII, Leuven, Leuven University Press, p. 367-384.

<sup>9</sup> *Fam.*, IV, 1, 35, v. 1, p. 160.

<sup>10</sup> Giuseppe Billanovich, *Petrarca e il primo Umanesimo*, Padova, Antenore, 1996, p. 181.

<sup>11</sup> *Fam.*, I, 1, 37, v. 1, p. 11.

るためには不可欠の前提であり、後の『エッセー』においても引き継がれることになる。

次に、書簡において二人称の対話相手が必要とされたのは、自身のことを含む些細な生活的事柄を文章にしたためることを正当化するためには、親しい間柄の聞き手を設定することが不可欠だったからだ。ペトラルカもやはりその枠組みを踏襲しようとするのだが、ルネサンスにおける書簡集は古典古代のものに比べて受け手が多様化していた。それは流動化した社会生活（人文主義者はまさにその先端を行く存在だった）の反映であり、事実ペトラルカも自身の書簡の宛先がかつてより多様なことを、自らの漂泊生活に帰している。ともかく、多様な受け手に向けて書く以上、その多様さに合わせて適切な表現をつづ選択する必要が生じる。

というわけで、精神的にも立場的にも異なる多くの人を相手に書くことになってしまった。あまりに多様な人に向けて書いたので、いまになってそれを読み返すと時折矛盾したことを言っているように思えるほどでもある<sup>12</sup>。

人間の多様性というのは無限であって、精神が多様なのは容貌がそうなのと変わらない。そして、一種類の食べ物だけでは多くの人のみならずひとりの腹をも常に満足させることはできないように、ひとつの精神もまた常に同じ文体を供されるべきではない。というわけで、苦労も二重のものとなる。宛先となる人物がどのような人間か考えないといけないし、自分が書こうとしているものをその人がいつ、どのような気持ちで読むかも考慮する必要があるからだ<sup>13</sup>。

多様な読者（一個人が相手ですら、時々に応じて想定される「読者」は多様である）に合わせて書くということは、それに対応して描き出される自己も多様なものとなり、時に矛盾が生じることすらある。他者との関係においてプリズムのように刻々と相貌を変えるこの主体は、その一定しなさ、矛盾をはらんだあり方という点では、後にモンテーニュが『エッセー』で描き出そうとした自己の姿に通じる。だが、ペトラルカは読者の多様性には言及するものの、自己そのものの多様性や変化については語らない。むしろ、書簡に編集を加えることでそれを制限し、統御しようとする。

最後に言っておこう。執筆年代が長期にわたり、世界の隅々まで届けられた手紙を一所に集めていちどに読めるようにしたために、ばらばらの手足だった時

---

<sup>12</sup> *Fam.*, I, 1, 27, v. 1, p. 8.

<sup>13</sup> *Fam.*, I, 1, 29, v. 1, p. 9.

は目立たなかったバランスの悪さもまとまった体としては容易に見て取れるようになってしまった。ある手紙で一度言われただけなら面白かったことも、全体でなんども繰り返されると嫌気がさしてしまう。というわけで、ある箇所では残すべきものも、他の箇所では取り去るべきということがあった<sup>14</sup>。

これは、書簡の多様な受け取り手から抽象的な読者を抽出し、編集された書簡集のなかで統一的な自己を形成しようとする試みだ。だが、読者が固有の相貌を失うと、その読者を鏡として映し出される自己像からも固有性は多少なりとも失われる。たとえば、ペトルルカが自身の生涯について語る次の部分だ。

それからその男は、幼子の柔肌がぶつかって傷つかないようにと、ちょうどメタブスがカミラをそうしたように、亜麻布でくるまれた私を節くれ立った木の枝に結びつけて運んでいった<sup>15</sup>。

幼い頃から各地を転々としていた自身の生い立ちを、ウォルスキ族の王メタブスが娘カミラを抱えて逃げるさまになぞらえて語っているわけだが、この箇所はウェルギリウスの『アエネーイス』を元にしてしている<sup>16</sup>。カール・エネンケルは先ほども注で触れた論文でこの箇所を取り上げ、親しい友人（当然ペトルルカの生涯については把握していることが想定される）に対して、自分の幼少期をこのように劇化された筆致で語ることの不自然さを指摘している。エネンケルはそこから、『近親書簡集』は編集された時点でもはや個々の書簡の宛名人を対象としておらず、幅広い一般読者を想定していると論じる<sup>17</sup>。ここに付け加えたいのが、その顔の見えない読者との間の「親しさ」を新たに演出するのが『アエネーイス』への参照だということだ。つまり、ここでの読者はペトルルカについての個別具体的な、「親しい」知識は要求されていないが、古典に関する態度や知識は共有していることが暗に求められているのだ。ペトルルカは叙情詩において、その語り手である叙情主体を普遍的な読者へと開くために共通の参照項として風景というトポスを用いたと、カールハインツ・シュティエーレは論じている<sup>18</sup>。それに倣うならば、ペ

---

<sup>14</sup> *Fam.*, I, 1, 31, v. 1, p. 9.

<sup>15</sup> *Fam.*, I, 1, 23, v. 1, p. 8.

<sup>16</sup> 『アエネーイス』第11歌540行以下。

<sup>17</sup> Karl A. E. Enenkel, *op. cit.*, p. 370-372.

<sup>18</sup> Karlheinz Stierle, « Identité du discours et transgression lyrique », *Poétique*, n° 32, 1977, p. 438. シュティエーレについては以下に基づく：廣田大地「叙情詩、叙情性、叙情主体 —— 各概念の成立について」p. 46-48（廣田大地ほか著『叙情の変容 フランス

トラルカは書簡の主体を外部へと開くために間テキスト的な古典への参照を利用したと言うこともできるだろう。私的な会話という様式性を保ったまま、その語る主体を抽象的な読者へと開くためには、書簡の主体は間テキスト的存在とならざるを得なかったのだ。

それは確かに一定程度機能する。書簡を中心として、のちに一定の態度を共有する共同体「文芸共和国」が形成されたのがその証左だ<sup>19</sup>。ペトラルカが古典古代のテキストの向こう側に見た「人間」は、あくまでもテキストの織目から浮かび上がってくるものであった。だからこそ、それが蘇る場所はまずはテキスト上でしかありえなかった。ペトラルカの書簡は、そうやってテキスト上に再起動させられた古典古代の理想を現実のものとするための装置として働いたのだ。

こうしてペトラルカは、書簡という場を使って高度に間テキスト的な主体を創り出した。ルネサンスのいわゆる人文主義的個人は、書簡という様式の中で策定され、形成されたのだ<sup>20</sup>。ペトラルカはテキストの彼方に人間を認め、自らそれを再生産してみせた。そこには、人文主義の理論的基盤としての文献学が、より良いテキストのために原著者や写字生への人間的理解を要求し、もって「生き方を変える可能性」を持つ「行動的プログラム」へと連なっていったのと同様の運動がある<sup>21</sup>。ペトラルカが再興した書簡というジャンルは人文主義者の理念をテキスト上で駆動させ、古典古代の理想の編目から浮かび上がった間テキストの主体を現実のものとする、そのようなポテンシャルを秘めたものだった。

\*  
\*\*

---

近現代史の展望』幻戯書房、2024、13－51頁）。以下も参照：Marco Santagata, « L'io lirico », dans *Petrarca, l'umanesimo e la civiltà europea*, éd. Donatella Coppini et Michele Feo, « Quaderni petrarcheschi », v. 15-18, Firenze, Le Lettere, 2012, p. 23-34.

<sup>19</sup> V. Pierre Mesnard, « Le commerce épistolaire comme expression sociale de l'individualisme humaniste », dans *Individu et société à la Renaissance*, Bruxelles, Presse Universitaires de Bruxelles, 1967, p. 16-31.

<sup>20</sup> Luc Vaillancourt, *La Lettre familière au XVI<sup>e</sup> siècle*, Classiques Garnier, 2003, p. 393-398. 以下も参照：Judith Rice Henderson, « Humanist letter writing : Private conversation or public forum? », p. 30, dans *Self-Presentation and Social Identification*, op. cit., p. 17-38.

<sup>21</sup> フランシスコ・リコ『ユマニズムの夢』清水憲男訳、岩波書店、2023〔原著1997〕、p. 36.

だが、そのようにして生み出された書簡的主体にはおのずから限界があった。すでに指摘したように、書簡上の主体は間テクスト的な構築物であって、その十全な受容には特定の知識や態度が必要とされた。それはつまり、書簡的な「親しい」文体で語る一人称的主体はあくまでも人文主義的な価値観の内側でしか成立し得ないということでもある。間テクスト性は、主体の擁立に際して叙情詩における風景ほどの普遍性を持ち得なかったと言っても良い。実際、「文芸共和国」を成立させていた書簡ネットワークは相互模倣の輪に陥っていたという指摘も存在する<sup>22</sup>。

モンテーニュが『エッセー』で実践しているのは、そのような状況へのひとつの回答であり、「文芸共和国」の外側で書く主体そのものを扱うにはどうしたらいいのかを探っていく過程でもある。モンテーニュはこういった問題について1巻39章「キケロについての考察」で直接触れており、そこで自分は書簡の腕前ではひとかどだと見なされていること、そして適切な相手さえいたなら『エッセー』も書簡形式になっていたかもしれないことを語り、さらに返す刀で同時代の書簡文化を批判している。

書簡について一言述べておきたい。なんでも友人らによると、私は書簡においてはなかなかのものになれるらしい。語りかける相手さえいれば、考えたことを公表するのに書簡という形式をとっただろう。かつてのように、私の興味を引いて、下から支えて持ち上げてくれるような、そんな相手がいれば。というのも、他の人がやるように、風と語らうなんぞ夢でしかできないし、真面目なことを話し合うために架空の名前をでっち上げるなんてのもどだい無理だからだ<sup>23</sup>。

「かつてのように」とはどうぜんラ・ボエシのことを言っているわけだが、その相手を失ったいま、モンテーニュは書簡を出すべき定まった相手を持たない。そして「他の人がやるように」宛先を捏造することも否定される。実際、書簡集として公開されたものの中には実際に宛名人に向けて出されたのか疑問なものも多かった。ここでモンテーニュはパーキエの書簡集を念頭に置いていたのではないかという指摘もあるが<sup>24</sup>、そもそもペトルルカの時点で書簡の宛先や日付を創作することはしばしば行われていた点はすでに触れ

---

<sup>22</sup> Guy Gueudet, « Archéologie d'un genre : les premiers manuels français d'art épistolaire », dans *Mélanges sur la littérature de la Renaissance à la mémoire de V.-L. Saulnier*, Genève, Droz, coll. « Travaux d'humanisme et de Renaissance », n° 202, 1984, p. 87-98.

<sup>23</sup> *Les Essais*, I, 39, p. 256.

<sup>24</sup> *Les Essais*, op. cit., p. 256, n. 6 (p. 1449).

た通りだ。ここでモンテーニュが行っているのはそういった人文主義的な実践の仮構性を曝きつつ、自分はその前提を共有しないという宣言でもある。さらに言うと、ここで否定されているのは二人称の虚構性だけではない。前半で扱ったように、対話相手を設定することは親しい文体で主体を形成するためには不可欠だった。モンテーニュは、その前提すらも欠いた状態で『エッセー』という文章がいかにして可能になるかを探っているのだ。

この「キケロについての考察」の章は前章「孤独について」での議論を引き継ぐ形で始まっている。記述が前後する形になってしまうが、ここからはその「孤独について」での議論を追う形で論を進めていきたい。「孤独について」は、ひとつの伝統的トポスを拒否するという印象的な身振りから始まる。

隠遁生活と活動的生との長々しい比較はよそにやっておこう<sup>25</sup>。

「隠遁生活と活動的生」の対比は古典古代以来続く伝統的トポスだが、人文主義者にもしばしば取り上げられてきた。ここでモンテーニュは、多くの場所で繰り返されてきた議論をもう一度取り上げることはしないと断言しているわけだが、そこには同時代にもこのトポスが好んで扱われていることへの目配せがある。モンテーニュはむしろ、そのトポスが従来どのような言外の機能を果たしてきたのかという点に着目し、「孤独」を称揚する議論はその実、世俗的栄光を求める野心のために利用されているということを曝きつつ（「野心に対してはこう言ってやろう。我々をして孤独を好ませているのはお前ではないか、と<sup>26</sup>」）、世間の交際に潜む危険（「感染 contagion<sup>27</sup>」）も指摘する。従って、この議論においてモンテーニュは隠遁の側にも交際の側にも立たない。表面的な隠遁生活は活動的生活と根本的には変わらないからだ。それはどちらも自身のあり方の基準を世間や他者に依存することであり、「この世でいちばん大事なのは自分自身でいられるようにすること<sup>28</sup>」だという結論が導かれる。

---

<sup>25</sup> *Les Essais*, I, 38, p. 241.

<sup>26</sup> *Ibid.*

<sup>27</sup> *Les Essais*, I, 38, p. 242.

<sup>28</sup> *Les Essais*, I, 38, p. 246.



この章ではあの名高い「店裏 *arrireboutique*」を持つ必要性も説かれている<sup>29</sup>わけだが、大事なのは孤独そのものではなく、自己の基準を外部に依存しないことにこそあるとされる。

我々の外にたまたまあった快適さは、それが楽しく思える限りにおいて活用すればよろしいが、それを自分の根本的なよりどころとしてはいけない<sup>30</sup>。

自己の基準を外部に依存した状態とは、ここまでの議論で言えば、文章の主体を間テクスト的な共に寄りかかる形で成立させていることを意味する。とはいえ、モンテーニュは直ちに同時代の実践を指弾するわけではない。その批判は、むしろその大元に立ち返って、ジャンルの祖であるキケロと小ブリニウスへの反論という形であられる。そのふたりの書簡では雑事から離れて学問的栄光を求めることが推奨されているのだが、モンテーニュはこれを、隠遁を勧めながら世間からの承認を求めるという点で矛盾していると断じる。これはそもそも、栄誉という目的を設定した時点で構造的に避け得ないものであった。

さて、小ブリニウスとキケロが提案している名声という目標だが、これは私の考えとは大きく隔たっている。隠遁の対極にあるものはまさにその野心にほかならない<sup>31</sup>。

これに対してモンテーニュはセネカやエピクロスが語っていたことを再話す形で論難するのだが、そこにはさりげなくキケロ自身の言葉が引かれている。

自分自身をそういう存在へとなさしめなさい。その人の前では変な歩き方はできないような、自分が恥ずかしく、同時に尊敬もできる、そういった存在に。  
「いつも心に立派な模範を抱くように」<sup>32</sup>。

この引用を見ると、この箇所では2人称を使って語りかけられているのはキケロその人と感じられてくる。さらにその背後には、キケロの書簡を元にジャンルを再興させたものの、だからこそキケロと同様の轍を踏んでいると見な

---

<sup>29</sup> *Les Essais*, I, 38, p. 245.

<sup>30</sup> *Les Essais*, I, 38, p. 247.

<sup>31</sup> *Les Essais*, I, 38, p. 251.

<sup>32</sup> *Les Essais*, I, 38, p. 252. キケロの引用は『トゥスクルム荘対談集』II, 22, 52 から。

されうる人文主義者たちの存在がうかがえるのである。そして、それ以上に重要なのは、ここでキケロ自身の言葉が引用されるそのさりげなさだ。『エッセー』における引用は常にそうだが、ここでもモンテーニュは引用元を明記しない。それが実は、いままさに批判されているキケロその人の言葉であるということには、単に議論の有効性を高める以上の意味がある。モンテーニュはここで、間テキスト性を利用して議論を、文章を成立させている。この箇所はまさに古典古代の書簡的な、2 人称に対する語りかけを再利用しているし、古典からの引用も陰に陽にちりばめられる。だが、その引用は当の発言者を批判する文脈にさりげなく織り込まれ、転用される。その口を借りて語るという体裁を取っているセネカやエピクロスにせよ、さりげなく紛れ込まれたキケロの引用にせよ、これらすべてが『エッセー』における一人称のもと再編成される。これこそが、モンテーニュが『エッセー』で提示して見せた回答なのだ。

先に述べたように、人文主義的な書簡的主体にはその間テキスト性に起因する限界が存在した。とはいえ、モンテーニュも、テキスト上に主体を構築する上で間テキスト的な手つきを取ることは否定しない。むしろ、人間のテキスト性をはっきりと引き受けているという点においてキケロ＝ペトラルカの的なパラダイムをしっかりと受け継いでいる。問題なのは、そうして構築した主体の読者として、特定の価値観を有するある種の共同体を想定している点にあるとされる。

きみともうひとり相手がいさえすればもう劇場としては十分なのだ。きみときみ自身でも。きみにとっての観衆をひとりだけにして、ひとりを全観衆としない<sup>33</sup>。

そうではなく、自らを自己の読者とすること、これがモンテーニュが選んだ方法だった。「孤独について」でなんども自己へ帰ることが説かれているのは、それが『エッセー』における一人称での語りを成立させる上で必要不可欠だったからだ。一人称の散文主体を、限られた共同体に置いてしか共有されない価値観ではなく、誰もが抱える自己という存在そのものを用いて読者へとひらく——この、一見すると個へと閉じこもるような手続きこそが、『エッセー』における一人称主体を作ったのだ。

---

<sup>33</sup> *Ibid.*

しかも、その主体は最初からただ自己のみを動因としては起動しない。モンテーニュは自身の文体について次のように語る。

私の自然な書きぶりはくだけた、私的な (*comique et privé*) ものだ。とはいえそれは私に特有の書き方であって、公の交渉ごとには向いていない。とにかく私の言葉は簡潔すぎて無秩序、ぶつ切りで、独特なのだ<sup>34</sup>。

だが、個人に特有の文体であっても、それは決して無から生じてきたものではない。モンテーニュが自分の文体の特徴として述べる「くだけた、私的な *comique et privé*」という特質は、直接的にはエラスムス的な基準を引き継いだものだが、同時に書簡におけるキケロのスタイルでもある<sup>35</sup>。ここでもやはり、モンテーニュはキケロを批判しながら、受け継ぐべき部分は（そうとは名指さずに）継承しているのだ。あらゆる表現は過去に依存するが、それを自らのものとしなければならない。これもまた、決してモンテーニュが初めて主張することではない。むしろ、ペトルルカ以来人文主義者がなんども繰り返し主張してきたことだ。「ミツバチの偉大さは、見つけてきたものを何か別の、より優れたものへと変成させることにこそある<sup>36</sup>」。モンテーニュの主張に特徴的なのは、そのためには過去との間に避けがたく持たれている紐帯を誇示するのではなく、抹消せねばならないとするところだ。

動物のようにせねばならない。巣穴への入り口で足跡を消す動物のように<sup>37</sup>。

テキスト上で主体を構築するにあたっては、とうぜん他の著作からの影響は受けるのだが、それは巣穴の前で足跡を消すことで、あるいはどの花から採ってきたとも判らない蜂蜜へと変換されることで、巧妙に密輸される。そうすることで初めて、自己の研究が書くに値する主題となった。これは文芸共和国の内側では取り得ない方法であった。なぜなら、文芸共和国はそもそも、古典古代に対する文献学的態度を前提とした共同体だからだ。モンテーニュは、やはり同じく人文主義がもたらした理路 —— ミツバチの偉大さ —— を先鋭化させることによって、共同体そのものから抜け出つつ、その共同体が抱いていた理想にひとつの解を提示したのだ<sup>38</sup>。

<sup>34</sup> *Les Essais*, I, 39, p. 256.

<sup>35</sup> キケロ『近親書簡集』2.4.1. V. Eden, *op. cit.*, p. 102.

<sup>36</sup> *Fam.*, I, 8, 23, v. 1, p. 44.

<sup>37</sup> *Les Essais*, I, 38, p. 252.

<sup>38</sup> 『エッセー』における忘却の肯定的評価も、この視座から理解することができる。こ

『エッセー』におけるエクリチュールと生の一体化は、まさにこのような理路によって導かれる。なぜモンテーニュはこれほどまでに書物的 *livresque* な本を書いておきながら、自らを「書物をこしらえる輩 *faiseur de livres*」ではないと称するのか。

私は行動することは教わりましたが、書くことは教わっておりません。自分の力はすべて、自身の生を構築することに費やしてきました。これこそが私の仕事であり作品なのです。書物をこしらえる輩ほど私と縁遠い仕事はありません<sup>39</sup>。

なぜなら、ここで言われている「書くこと」は、作者に影響を及ぼすことを目的としていない類のものだからだ。モンテーニュにとって、書くことは主体を練り上げることであり、それは実存的な生において日々自己を形成していくこととなんら変わりはない。だからこそ、生活することが、実存的主体になんら影響を及ぼさない書物を作ることよりもよほど立派だとみなされる。

私たちは大馬鹿者だ。誰それは生涯無為徒食であった、きょう私はなにもしなかった、などと言っている。なにを言っているのか。生きることをしなかったとでもいうのか。それこそが我々の務めの根源にして最も輝かしいものではないか。（中略）自身の人生について思い巡らし、それに手を加えられたというのなら、なによりも立派な仕事を果たしたのだ<sup>40</sup>。

自己の実存的生を第一の主題とし、その探求や構築を目標とすること。それはいま想像するほど単純なことではなかった。それにはまず人文主義者が書物を通して主体を「発見」する必要があった。そこからさらに、その間テキスト的な主体を、出自を隠蔽しながら著者＝読者という閉鎖系に封印することで、テキストと実存的主体の相互作用が完結する。ここについて「ユマニズムの夢」は実現した。しかしそれは、当初素朴に夢見られた古代的理想の復興という形でではなかった。『エッセー』における一人称の散文主体は、人文主義の理念をその自己否定に至るほどまでに貫徹することによって獲得されたのだ。

---

の点については Teresa Chevolet, « « Si excellent en l'oubliance » : oubli, humanisme, écriture chez Montaigne », *Étude de lettres*, v. 276, 2007, p. 323-346 及び拙論文「モンテーニュにおける模倣と忘却：自然との類比的関係とその起源」『仏語仏文学』第 51 号、東京大学仏語仏文学研究会、2018、21－36 頁を参照。

<sup>39</sup> *Les Essais*, II, 37, p. 824. この箇所はデュラス夫人に宛てられており、書簡的な体裁をとっている。

<sup>40</sup> *Les Essais*, III, 13, p. 1158.